

2冊の追悼記念号を編集して

日野一郎先生と岡本勇先生

川口 徳治朗

平成9年11月、神奈川県考古学会は二つの悲報を聞くことになった。11月4日に初代会長の日野一郎先生が、11月16日に二代会長の岡本勇先生が逝去された。両先生は本会の設立と発展にご尽力されたばかりでなく、学界における学術研究、埋蔵文化財の調査と保護、教育普及活動など幅広く活躍されたことは周知のとおりである。様々のところで、先生にご指導をいただいた私たちにとって、この悲報は愕然とさせるものであった。

年を越して、本会役員会の席上、次号の「考古論叢神奈河」を両先生の追悼記念号にすることが決まった。会誌担当のほかに特別編集委員として明石 新、境 雅仁、佐々木博昭、武井則道、野内秀明の諸氏にも加わっていただき、刊行に向けて企画を練ることになった。巻頭序文、年譜、著作目録、講演目録、発掘調査歴、代表論文の再録、寄稿論文などを主な内容として、原稿執筆の依頼や資料の収集と作成にとりかかった。

編集の過程で、日野先生と岡本先生は業績の趣が異なることに気付いた。日野先生は武相文化協会を中心として、講演、講座など文化財に関する普及啓発活動が多く、研究の成果を様々なかたちで教示する教育者としての立場を強く感じさせた。岡本先生は日本各地の調査へ精力的に出向き、こ

れを基に報告書、研究論文の多くを築き上げた。会長就任の際に、学界で注目される研究誌を発行したいと抱負を述べられたことを思いだす。

日野先生追悼記念号を「8集」とした。巻頭写真には会長時のものを使わせていただいた。序文は先生が仏教考古学を専門にされていたことから、同分野の研究者である立正大学学長の坂詰秀一先生にお願いした。代表論文の再録は、「石製塔婆」に関するものを中心に選定した。寄稿論文の執筆は古代、歴史考古学の分野から募った。

岡本先生追悼記念号を「9集」とした。巻頭写真は1961年横須賀市吉井貝塚の調査時のものを使わせていただいた。序文は長年、ご一緒に縄文文化研究を進めてこられた慶応義塾大学名誉教授の江坂輝弥先生にお願いした。代表論文の再録は、縄文時代の労働用具、集落、埋葬について論究したものを選定した。寄稿論文の執筆は先史時代の遺跡と遺物に関する分野から募った。

8集は平成12年10月1日に、9集は平成13年2月28日に完成した。二つの追悼記念号は直ちに両先生の奥様へお届けした。完成本をご覧いただき大変にお喜びになられ、本会に対し感謝の一言をいただいた。

炉穴発見から60余年

—船橋市飛ノ台貝塚保存と活用の実と虚—

中村 若枝

1938年（昭13）9月25日朝8時、上野西郷隆盛の銅像前で怒鳴るような声が響いた。

『東京考古学会の遠足会へお出かけの方はお集まり下さい』

「知った顔もいれば、其の扮装から云ってどうも今日の研究会の参加者としか思へない人たちも二三見える」（1938考古学9巻10号）という。団体料金でひとり30銭の切符を手に、東京考古学会第1回遠足会がスタートした。目的地は、京成線海神駅下車“下総飛ノ台貝塚”である。30余名の参加者の中には、山内清男・直良信夫・酒詰仲男・乙益重隆・江坂輝弥といった諸氏の顔があった。銅像わきのベンチに立ち、集合の掛け声をかけたのは、この日のコーディネーター当時25歳の杉原荘介氏である。

飛ノ台貝塚は、1932年（昭7）杉原氏が19歳の時調査した遺跡で、縄文時代早期後葉茅山式期の貝塚として知られていた。遺跡は、現船橋市立海神中学校一帯、谷に沿った南緩斜面に位置している。

終日好天に恵まれた第1回遠足会最大の成果は、“未見の奇妙な竪穴”であった。翌年の報告（1939考古学10巻4号）では炉穴とあり、『炉部と足場を持つ楕円形の窪みで、煮沸用の炉ではないか』と論述されている。以後、炉穴初発見の遺跡として、学史に位置付けられることになる。

戦後間もない1950年（昭25）には樋口昇一氏ら国学院大学が校庭部分を調査し、住居址と煙道付炉穴を検出した。

1977～8年（昭52～3）、校舎改築に伴い大規模な発掘調査が行われた。調査団（団長金子浩昌氏）が組織され、私も調査する機会を与えていただいた。土台で攪乱されてはいたが、住居址5件、炉穴207基、貝層34ヶ所などが検出され、東京湾

東岸を代表する縄文早期（野島式～茅山下層式期）の大集落であることが明確になった。特に、炉穴焼土上で一括土器が出土する事例が32あり、飛ノ台パターンとして報告された。また貝塚は廃絶した住居址や炉穴内に形成されていたが、小型のハイガイが70%近くを占めていた。貝以外の動物遺存体は多くはなかったが、スズキ・クロダイを主とした魚骨は野島式期の特定の炉穴に偏在していた。

成果が上がればあがるほど、期限は迫ってくる。これ以上の期間延期は難しい状況の中、関係者の熱意が実り校舎の設計変更が行われた。そして校舎南側約1000m²は現況保存される事になった。

同年5～9月、変更図に基づき第2次調査を行うことになった。ここでも住居址1件、炉穴30基等を検出した。

1889年（平1）学校西隣の畑に公民館建設計画がもちあがり、確認調査が行われた。攪乱が著しくほとんど残っていない、という所見が提出された。1990年2月、私は、第1次の遺物整理のため13年ぶりに訪れ、この事を知った。

第3次にあたる本調査は、2年後の1992年2月に始まった。実際に調査してみると、確認調査の予測とは大きく異なり遺構が累々と検出された。その数は2400m²の調査予定区を半分発掘した時点で、住居址10件、炉穴166基、土坑12基、貝塚9ヶ所等を数えた。旧石器時代の遺物散布地も確認され、このような遺構密集状態は調査区全域に広がっていることがわかった。

調査団は、a 調査期間の延長 b 未調査区の遺構の保存をするために公民館の設計変更 c 公民館は別の場所に建設し遺跡を現況保存後史跡公園として整備し展示施設も設ける といった3段階の案を提示した。

公民館建設は至上命令だという市の方針は、そう簡単に変更できるとは思えなかったが、「これだけの遺跡を掘り尽くしてしまうわけにはいかな

い」という一心であった。

翌1993年、住居址を取り巻く炉穴群の一隅から、予想だにしていなかった合葬人骨が検出された。浅い墓穴に抱き合うように埋葬された2体は森本岩太郎氏によれば成人男性と若い女性であったという。これが契機となり遺跡は保存し、史跡公園として整備することになった。

保存から活用に向け動きはじめる事になる。まず、屋外展示施設として型どりによる遺構の再現を提案した。

基本設計・実施設計と進む中、博物館も学校施設と併設ではあるができる事になった。私は展示資料の選定と展示構想のシナリオ案等の作成を担当した。

しかし、立場や見解の相違はやがて軋轢を生じるところとなる。一番の懸念は、博物館準備室もなく「専門家に任せると市民には難しすぎる」という認識の上に立ち、「専門家のご意見は伺いました。あとはこちらで」という市の取り組み方であった。これで本当に博物館ができるのだろうか。金子先生も私も、立ち止まざるを得なかった。そして、この溝は埋まることはなかった。

保存決定から5年後、市はようやく博物館準備室を開設し、専任スタッフとして小中学校の先生2人を配属した。着任して考古学に初めて接したと聞く。考古専門職員も兼任ながら参画していたが、専門分野も異なり、飛ノ台について熟知している人はいなかった。

通算10年以上に及ぶ歳月、飛ノ台貝塚の発掘と遺物整理にかかわり、遺跡保存と博物館設置までこぎつけたが、肝心の研究成果を存分に伝える事はできないまま「あとはこちらで」となった。

2000年11月4日飛ノ台史跡公園博物館がオープンした。展示会社が作った博物館である。

1993年から、飛ノ台貝塚を守る会を結成し、市民の声を反映した博物館をと訴えてきた。博物館友の会ができたなら会は解散すると決めていたが、



飛ノ台貝塚出土土器のコーナー（館図録より）

「尖底から平底へ」という展示案を出したが、「あとはこちらで」であった。土器の大半は底部を欠損しており、根拠がない限り復元は胴下部までとしておいた。展示では尖底か平底か一目でわかる工夫が必要と考えていた。しかし、その配慮はなく「平底が多い」と誤解をまねく展示となっていたばかりでなく、両者が混在して並んでいた。

発刊した会報は100号を数えようとしている。

飛ノ台にかかわった研究者だけでなく、市民からも距離のある博物館である。すべての人が共有しているのは、遺跡は残った・・・という原点ではなかろうか。一人でも多くの人に足を運んでいただき、しっかり見て来ていただきたいと思う。

地域博物館としての特色の乏しさ。地道な研究成果より手軽な話題性。この博物館は考古学が置かれている現実そのものではないだろうか。

船橋市飛ノ台史跡公園博物館への交通

東武野田線「新船橋駅」から徒歩約8分

京成線「海神駅」から徒歩約15分

海神中学校隣 TEL047-495-1325

休館日 月曜日、祝日の翌日、年末年始

史跡称名寺境内

鈴木 重信

1 所在・交通

所在地：横浜市金沢区金沢町212番地外

交通：京浜急行・金沢文庫駅（東口）またはシーサイドライン横浜・海の公園柴口駅下車。それぞれ徒歩約15分。

2 称名寺のあらまし

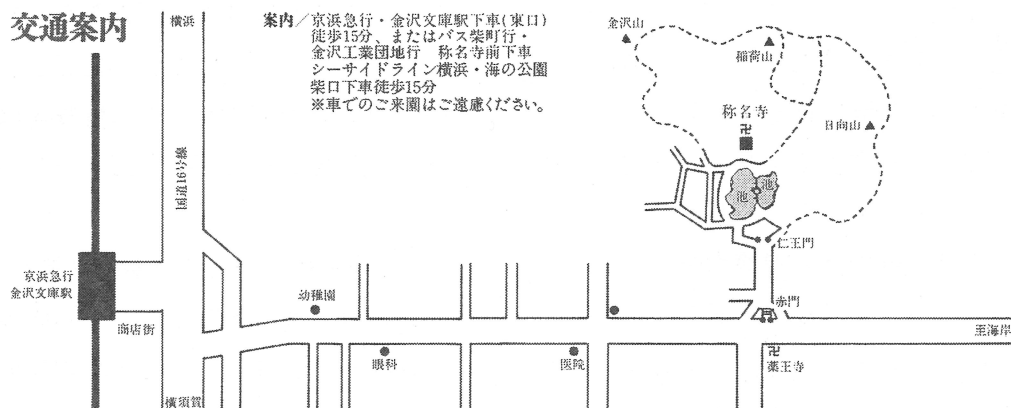
称名寺は、「^{きんたくさん}金澤山称名寺」と号し、西大寺末の真言律宗、別格本山として、今日に法灯を伝えています。本尊は、木造の弥勒菩薩立像（重要文化財）で、鎌倉時代後期の東国における代表的な作品とされています。

称名寺草創の年代は明らかにされていませんが、北条^{さねとき}実時（1224～1276）が居館内に営んだ持仏堂から発したと推定されています。称名寺の名が初めて記録に見えるのは、奈良西大寺の僧^{えいそん}叡尊が1262（弘長2）年に鎌倉に下向した際の旅行記である『関東往還記』です。その後、1267（文永4）年に実時は下野薬師寺から^{みょうしょうぼうしんかい}妙性房審海を開山として招き寺を真言律宗に改めます。実時の子^{あきとき}頭時（1248～1301）の時代には、三重塔などが造営され、伽藍の整備が進められました。さらにその子^{さだあき}貞頭（1278～1333）の代には、伽藍の再造営が行われ、苑池を中心に金堂・講堂・仁王門などの七

堂伽藍が整えられます。そのようすは、『称名寺絵図並結界記』（重要文化財）に窺うことができます。絵図裏面の結界記には「元亨三年」（1323）と記されています。しかし、^{かねさわ}金澤北条氏三代にわたって整備されてきた称名寺も、1333（元弘3）年に鎌倉幕府が滅亡すると寺運も次第に傾き、1633（寛永10）年には称名寺を訪れた^{たくあん}澤庵が「本堂一字あり、諸堂みな跡はかり也」（『鎌倉巡礼之記』）と書き記しています。

3 史跡称名寺境内

史跡称名寺境内は、関東大震災の前年にあたる1922（大正11）年10月に、「称名寺内界 附金澤氏墓及開山審海上人以下世代塔」の名称で、中心区域である内界部分と墓所部分、63,956m²が国史跡に指定されました。1972（昭和47）年には内界を取り巻く金沢山・稲荷山・日向山の三山や惣門から仁王門にかけての^{たっちゅう}塔頭地域などを含む91,289m²が追加され、史跡の名称も「称名寺境内」と改められました。その後、横浜市教育委員会により、1978～1987（昭和53～62）年度にかけて、史跡の中心部を占める庭園苑池の保存整備事業が実施され、一部の発掘調査も行われました。10年を要する事業の結果、苑池の中島に架かる反橋・平橋、景石や植栽などが復元されました。訪れる人々に浄土庭園の景観を楽しませてくれます。



横浜市教育委員会『史跡称名寺境内—鎌倉を守った東の要衝—』より

4 旧伽藍跡の発掘調査

旧伽藍跡の発掘調査は、1971～1974（昭和46～49）年の一連の調査、1999（平成11）年の庫裡の増改築に伴う範囲確認調査、さらに2000・2001（平成12・13）年の確認調査があります。いずれも『称名寺絵図並結界記』の称名寺絵図を基礎資料とした遺存状況などを確認するための発掘です。ここでは、それぞれの調査成果を紹介する紙数もありませんので、今年の調査について簡単に紹介することにします。この発掘調査は、横浜市教育委員会が主体となり、（財）横浜市ふるさと歴史財団が現地調査を担当しています。今年の調査は、3年計画の1年目にあたります。調査の対象は、金堂の背後に位置する講堂をはじめとする方丈・両界堂・僧坊などの施設群としました。調査の結果、講堂の基壇は東西25m、南北19m、遺存部の高さ約40cmの規模があり、周囲に浅い溝状のものがめぐっていることがわかりました。また、この溝や周囲の地業面には、礎石とみられるものや抜き取られた跡とみられる窪みが散見されました（写真1）。残念ながら、基壇上面の礎石や南側の階段などは確認することができませんでした。方丈や両界堂推定部分などでは、礎石列が見つかりました。両界堂部分では、複数の時期に営まれた建物が存在したことが確かめられました。また、北西側に玉石を敷き詰めた場所もありました。僧

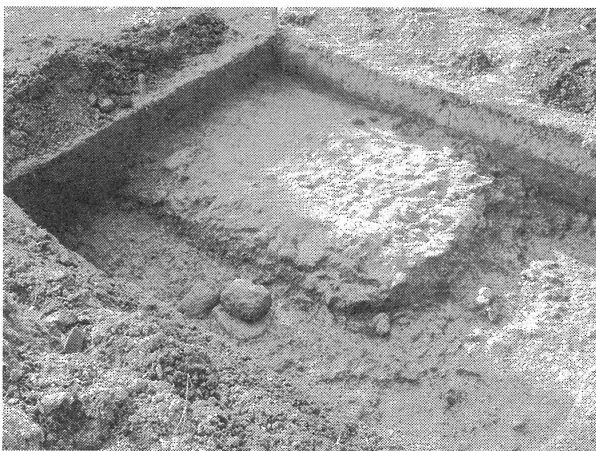


写真1 講堂基壇北東部の状況（北東より）

坊推定部分では、礎石が散発的に見つかっていますが、組み合わせなどを確定するには至りませんでした。地業を施した面も複数確認されています。これらの建物の規模についても、明らかにすることはできませんでした。一方、称名寺絵図に描かれていない遺構の一部を調査することができました。両界堂南西側の東西方向に走る水路状遺構（写真2）や両界堂北西側の山裾に開口するやぐらなどがその例で、いずれも称名寺絵図よりも新しい時期のものです。そのほか、講堂の地業層に覆われた溝も発見されています。



写真2 両界堂の南西で発見された水路状遺構（東より）

3年計画の2年目にあたる今年度の調査は、苑池西側の旧「神奈川県立金沢文庫」跡地とその北東に位置する三重塔跡、さらに内界東側の建物群を調査の対象としています。埋め戻しまで含めて年内終了予定で、10月から進めています。次年度は報告書の刊行を予定しています。

* * *

境内に行んでみると、世の喧騒を離れてのどかな気分になります。池には鯉や水鳥達が泳ぎ、日溜まりでは亀が甲羅を干し、上空にはトンビが舞っています。まだ浄土世界をみたことはありませんが、まるで別世界にいるようです。壮麗な伽藍の復元は困難としても、史跡整備と活用がさらに進められればと思います。

* 写真提供：（財）横浜市ふるさと歴史財団

考古論叢神奈河第9集 論文展望

条痕文土器群後半期の諸段階

—茅山下層式・茅山上層式土器とその周辺の土器群—

野内 秀明

戦後の茅山式土器の細分研究は、野島貝塚・茅山貝塚・鵜ガ島台遺跡・吉井貝塚といった系統的な発掘調査によって、野島式・鵜ガ島台式・茅山下層式・茅山上層式土器の各型式に細分されていた。

各型式概念の基礎には、戦前に赤星直忠や山内清男らによって古式縄文土器の一型式として設定された茅山式土器の理解があった。この理解を前提として、一連の調査過程で細分諸型式の内容が示され、より確実なものへと深化されていった。

そして、条痕文土器群研究は、調査が進むにつれて、赤星から岡本勇へと引き継がれていった。赤星の示した茅山式土器の標識資料と細分諸型式の岡本の認識変化を整理し、吉井第2貝塚の調査結果など新たな資料を踏まえ、条痕文土器後半期の茅山下層式の成立から茅山上層式土器終焉までの諸段階について検討した。

茅山下層式から茅山上層式への変容は、主として先行型式の鵜ガ島台式から受け継がれた文様要素の内在的变化でとらえられたが、条痕文土器群後半期は周辺地域に独自の型式表象をもった土器型式が成立・展開する。その系統の変容がとらえられつつある伊豆以西の土器群とともに、阿武隈山地以北の土器様相の把握などが今後の課題である。



東日本における磨製石剣の意義

—三浦半島赤坂遺跡出土の例を中心に—

中村 勉

三浦市赤坂遺跡は、三浦半島南部における弥生時代の拠点集落である。この遺跡からは、現在4点の磨製石剣が出土している。磨製石剣の出土例は、神奈川県内でわずか10点にすぎず、その点で赤坂遺跡の例は特筆すべきものがある。磨製石剣は西日本ではすでに弥生前期に出現し、中期において所謂鉄剣形のもの畿内を中心に広範囲に分布するようになる。関東地方や中部地方および東北地方での磨製石剣は、この鉄剣形のもので従来その出土は少なく、それに変わって有角石器あ

るいは有孔石剣などの独自の武器形石器が目されていた。しかし最近、磨製石剣の出土例がわずかではあるが増加してきている。ここでは赤坂遺跡から出土した磨製石剣の特徴をあげながら、関東地方や中部地方および東北地方の例を参考に東日本の磨製石剣を分類し、畿内を中心とした西日本の磨製石剣と対比しながら、その意義について考察をおこなった。その結果、東日本の磨製石剣の形態的特徴は、西日本のものと類似しており、このことはその出現の契機を考えると、西日本との同質的文化が背景に存在していたであろうことに気づくのである。

キーワード：弥生時代・磨製石剣・武器形石器



横浜考古学事始

—100年前の歩けオロジスト・小林與三郎のこ—

岡本 孝之

横浜市内で最初に発見された遺跡は西区の税関山遺跡である。1894（明治27）年に栃木県宇都宮市野沢遺跡について沼田頼輔とともに『東京人類学会雑誌』に報告した小林與三郎は、1897～1899年の3年間に横浜市内外の貝塚や遺跡の発見につとめ、東京人類学会に報告して『日本石器時代人民遺物発見地名表』第2版、第3版に集録された。その数は奈良県から青森県まで合計107遺跡となる。横浜市内では48遺跡ある。磯子区、南区、中区、西区から神奈川区、鶴見区にかけて先駆的な遺跡の分布調査を行い、山手、元町、風早台、荒立の諸貝塚などを発見した。

小林は栃木県出身で、沼田により「斯学篤志の人」と紹介されているのみで人物像については不明である。1899年12月に慌しく韓国釜山郵便局に赴任したことが記録されているので、横浜の郵便局にも勤務していた可能性があるが確認できなかった。まだ朝鮮を併合する1910年以前のことであり、1900年における東京大学・八木奘三郎の韓国調査にも協力しており、海外へ展開した個人史としても興味深い。

横浜市内の貝塚については、その後酒詰仲男らによって調査研究が進められたが、今日では二三の例外を除いて保存状況は悪い。研究史を追跡し、再び貝塚を歩くことによって、横浜の石器時代を甦らせたい。

キーワード：貝塚・遺跡分布調査・考古学史・近代・横浜

小田原城跡見学会に参加して
会員の広場
神奈川に新しい考古学博物館を
考古学講座『かながわの縄文文化の起源を探る』
開催される
神奈川考古学再発見 琥珀大珠（秦野市東開戸遺跡）
鎌倉市由比ヶ浜南遺跡出土の板碑 齊木秀雄
情報案内 特別展・見学会・講座等・講演会・研究発表会
お知らせ 総会・考古論叢神奈河第6集執筆募集

第11号 1996年9月1日

中国漫歩
三上次男先生と神奈川県
平成8年度神奈川県考古学会総会報告
会員の広場 会員の声にお答えします
第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会開催のお知らせ
神奈川考古学再発見 平塚市坪ノ内遺跡検出の鍛冶遺構
横浜市歴史博物館と国指定大塚歳勝土史跡公園を訪ねて
情報案内 特別展・見学会・講座等・講演会・発表会・
シンポジウム・会員名簿・編集後記

第12号 1997年3月31日

神奈川の考古学—1996年の調査から—
鶴田栄太郎と下寺尾寺院跡
第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会が茅ヶ崎市
にて開催される
横浜市歴史博物館特別展 縄文文化誕生 一都筑区
花見山遺跡が解き明かす最古の土器文化の謎—
考古学講座開催される（『かながわの弥生時代の社
会—後期の環壕集落から考える—』）
相模原市立博物館の見学会に参加して
神奈川考古学再発見 煉瓦について
月見野期のナイフ形石器
平成9年度総会と報告会のお知らせ
情報案内 特別展・講演会・お知らせ 会員名簿・編集後記

第13号 1997年8月31日

会長になって
平成9年度神奈川県考古学会総会報告・役員横顔
第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会開催のお知らせ
神奈川考古学再発見 海蝕洞穴遺跡の生活痕跡
朝光寺原1号墳の甲冑
'97かながわ考古トピックスの反省
第1回花見山研究会開かる
情報案内 展示会・考古学講座・調査成果発表会・公開セミナー
お願い・編集後記

第14号 1998年3月31日

服部隆博
岩田與一
岡本孝之
白石浩之
霜出俊治

小出義治
吉田章一郎
*
*
林原利明
千葉美代子

寺田兼方
小出義治
川上久夫
諏訪順
小暮中和
後藤喜八郎
役員会記録・平成10年度総会と報告会のお知らせ・募集
情報案内・会員名簿・展示会・編集後記

第15号 1998年10月15日

モグラの独り言
平成10年度総会の報告
第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会開催のお知らせ
森将軍塚古墳の見学会に参加して
会員の広場—わたしの研究—横浜南部相模層群
地層包含個体調査について
見学会のお知らせ 箱根石仏群・情報案内 特別展・調査発表
会・講座・1998年度新入会員・会員からの伝言・編集後記

第16号 1999年3月31日

何だか 変だぞ！
第22回神奈川県遺跡調査・研究発表会開催される
元箱根石仏・石塔群を訪ねて
神奈川考古学再発見 舶来遺物「佐波理匙」
横須賀市長浜ノ上遺跡出土の石器について
考古学入門講座「縄文ムラの風景」
情報案内 特別展・平成11年度総会のお知らせ
新入会員・住所変更・編集後記

第17号 1999年9月30日

明日はあるのか
平成11年度 通常総会報告
韓国慶州史跡見学会ツアーに参加して
長柄桜山第1・第2古墳発見の経緯について
新刊紹介 神奈川県考古学会編『かながわの遺跡めぐり』
松本司『風水ウォーキング古代遺跡謎解きの旅』
見学会の御案内 長柄桜山古墳・台湾（国立故宫博物院）
展示会の御案内・平成11・12年度役員体制・編集後記

考古かながわ 第22号

発行 神奈川県考古学会
発行日 2002年1月31日
編集者 岡本孝之・近藤英夫・安藤文一・
小林義典・渡辺 務
印刷 (有)湘南グッド
発行者 神奈川県考古学会会長 寺田兼方
〒251-0043
藤沢市辻堂元町4-17-4 やよい荘102
郵便振替 00240-9-71208